

ある日、夕食の材料を買いに出かけた時、私はよく見知った人と会った

「あれ、彩八？」

「えっ……隼くん？」

「久しぶりじゃん、卒業して以来だから…3年ぶりくらい？」



「元気してた？…って、彩八、その指輪って」

「えっ…？あ、そうそう、私結婚したの」

「へえーそっか。で、旦那とは上手くやってんの？」

「うん、すごく良くしてもらってるし、とっても幸せ」

「そうじゃなくて、夜の方はどうなのかなって」

「そ、それは……」

「彩八のエロい声聞いてたら

こんなに勃っちゃったよ」

「だからまずは口でしてもらおうかな」

（久しぶりに見たけどやっぱり

すごく大きい…）

（こんなの絶対啜えられない…）

ビクッ

ビクッ

ドキ
ドキ♡
ドキ♡



「はははっ、やっぱり全部啜えるのは無理か。

ちゃんとフェラしてもらえる旦那が羨ましいよ」

「んっ…ちゅっ…んんっ……」

(太過ぎて全然入らない…やっぱり大きすぎるし…
男の人の味がする…)



「あーもう射精そう…」

数年ぶりの元彼の精液、全部口で受け止める！

「んっ!? んんー……っ!!」



「んっ…んくっ…」

(喉に引っかかって…全然飲み込めない…)

「ハア…ハア…やっぱ彩八のフェラ最高」

「このままもう一回するから服脱いでよ」



「こんなにグチョグチョになってるし、
本当は期待してたんじゃないのか？」

「だめ…そのままするなんて…
せめてゴムは着けて」

「そんなこと言っても持ってきてないし、
普通のじゃ俺のは入らないからさあ」

「でも…お願いだから生ではしないで…」



「ここまで来てやめられるか…って」
「んんんうっ!!」

「このままハメまくってまた俺のチンポ以外じゃ
満足出来なくしてやるよっ!」

「待って! く、苦しい…いっ…いっ…♥」



「おっ♥奥は…あっ♥突かないで…っ♥」
（思い…出しちゃう♥忘れ…たいのになっ♥）
「あっ…♥はっ♥はあああ…♥」

ぬちっ

ズッ

んんん

加減



「おおおおっ っ♡

ゆっくり抜くのダメえええっ♡」

すーぽーん♡

ニャー♡

びん♡

びん♡

「んひいいいいつつ♡

やっ♡あっ♡イクッ♡やめて!!♡イクッ♡イクう♡」



「このまま…膣内に出すぞ！子宮に精液浴びせられてイけっ！」

「あああああっ！♡中はだめ！♡あなたっ♡ごめんなさいいい！♡
おっ♡おっ♡ほおおおおおっ♡」



「俺と付き合ってた時にあれだけやりまくってたんだし、他の男で満足できてんのかなって思ってた」

「…そんなこと今の貴方には関係ないでしょ、もう付き合ってもいないんだから」

「ま、確かにそうだけど」

「それはそうと、せっかく久しぶりに会ったんだし1回でいいからやらせてくれね？」

「何言ってるのよ…無理に決まってるでしょ。私結婚してるのよ？」

「そんなことは分かってるよ、でも彩八の体が忘れられなくてさあ」

「昔撮った動画、まだ残しててたまに使ってたよ」

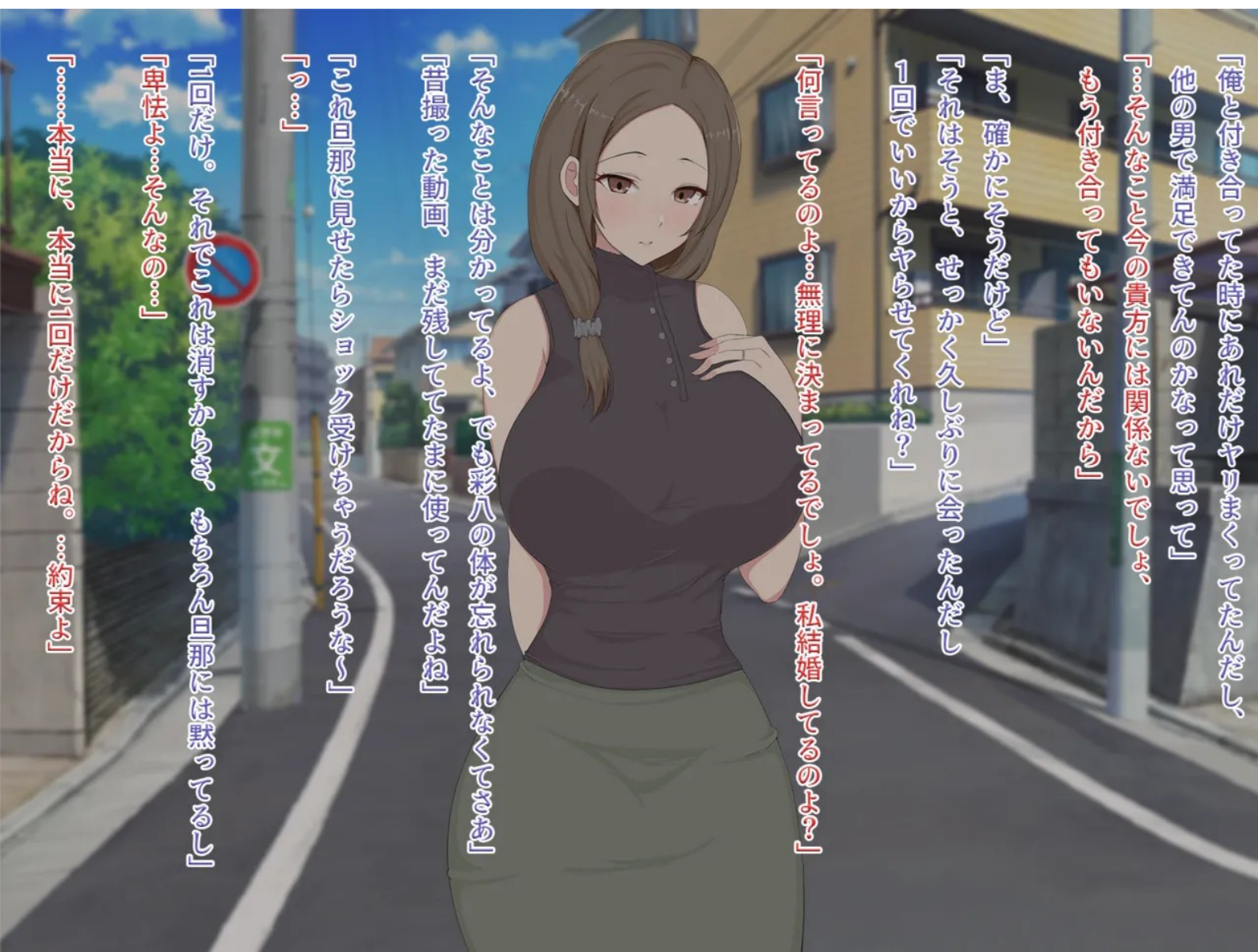
「これ旦那に見せたらショック受けちゃうだろうな」

「っ…」

「2回だけ。それでこれは消すからさ、もちろん旦那には黙ってるし」

「卑怯よ…そんなの…」

「……本当に、本当に2回だけだからね。…約束よ」



「ハア…ハア…良かったよ彩八
約束通りあれは消すよ…って聞こえてないか」





あれ以来彼から連絡が来ることはなかった
でも、私はあの日の事を思い出してしまっている

(忘れなきゃって思ってるのに…
どうしてこんな気持ちになっちゃってるの…?)
(自分でする回数もすごく増えちゃったし…)



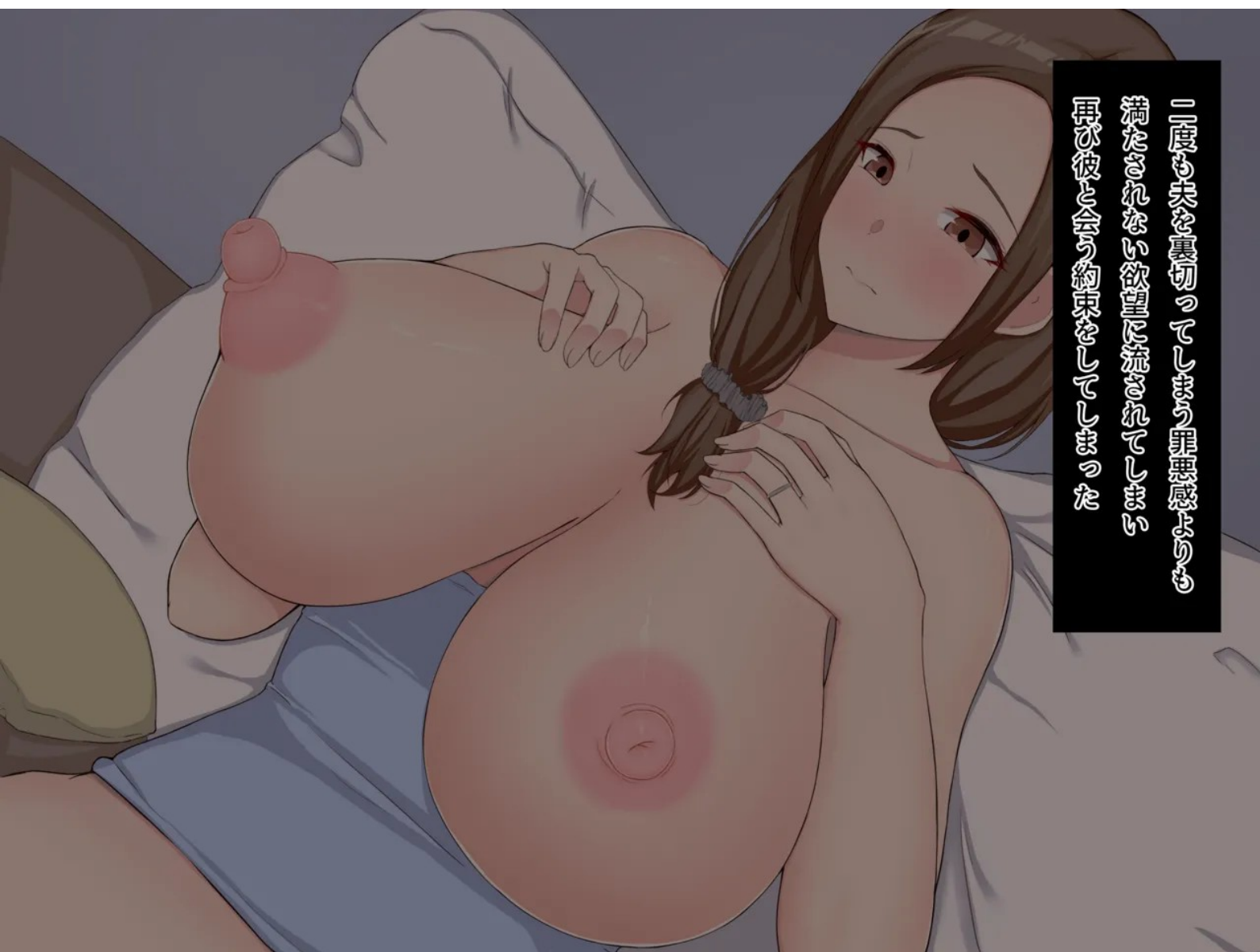
「ああっ♥気持ちいいっ♥イクっ♥ああああっ♥」



「気持ち：いいのに：どうして：指じゃ全然物足りない：❤
もう一度したい：あなた：ごめんなさい：❤」



一度も夫を裏切ってしまう罪悪感よりも
満たされない欲望に流されてしまい
再び彼と会う約束をしてしまった



「まさかまた連絡くれるなんてねえ
やっぱり俺のこと忘れられなかったんだ？」

「うん…どうしても…隼くんのおちんぽがまた欲しくなっちゃって」
「なら今日もたっぷり犯してあげるよ、彩八」
「…うん♥」





はあ...♡

あ...♡

「ああ...♡手、おっきい...♡
もっとおっぱい触って♡」

♡♡

アハハ





「あっ♥乳首気持ちいいっ♥
いくっ♥もうイッちやうう♥」

彼の脅迫まがいの要求を呑んでしまった私は
かつての男性に夫に黙って再び体を許してしまうことになった





「はぁ…♡はぁ…♡
そんなにおっぱいが好きなら
今度はおっぱいします…?♡」

(すごく熱くて硬い…♥それに挟んでも先っぽが飛び出してくる♥)
「んー?どうかした?」

「あっ…その…あの人にもたまにしておげるんだけど
全部隠れちゃうから…」
「そりゃあそれだけ胸がデカけりゃ全部埋まっちゃうでしょ」



「やばっ、気持ち良すぎてもう出るー!」

「んっ♡んっ♡」
(勢いすごい♡顔にまでかかっている…♡)





「さっきから疼いちゃってもう我慢できないの...♡」
「だから...ねえ...そろそろおまんこも触って?♡」



「ねえ…♡はやく♡おまんこ描き回して♡」
「この前みたいにいっぱいイカせて…♡」



「あっ♥挿入ってきたあ♥」
「気持ち良すぎてっ♥すぐイッちやいそう♥」



「そこっ♥気持ちいいっ♥ダメっ
イクっ♥もうイクうっ!!♥」



「あへっ♡すご...いい...♡もうイッちゃった...♡」
「まだ欲しい...♡おち...んぼ...でイカせて...♡」
隼くんのおちんぼ挿入れてえ...♡」



「ねえ…お願い…早く挿入れて…♡
もう…私…我慢できない…♡」

ドキッ
ドキッ

ハァ♡

ハァ♡

ギィ
ギィ



「おっきい...♡
やっぱり隼くんのおちんぼが
一番いいところに当たる...う...♡」

「こんな恰好させないでさっさと済ませればいいでしょ…」
「まあそんなに焦るなよ。それにまた胸大きくなった？」

「……………いいから早く終わらせて」





「今日はあの人帰って来ないの...♡
だからたくさん可愛がって...ね♡」



「相変わらず胸は感じやすいんだね
ほら、もう乳首が回くなった」

「いや...言わないで.....♥」

「乳首でイクまで開発してやったからな
そう簡単に感度は戻らないでしょ」

「やだ...♥やだあ...♥」



「しつこく揉かれた後にグリグリされるの好きでしょ
昔はこれでイキまくってたけど耐えられるかな？」
「んんっ♡くっ♡ふう♡」

「イけっ！乳首でイけっ」
「いっ…イかな…いっ…♡」



(ダメ:こんな簡単にイキそうになるなんて:♥
これほど上されたらイッちゃう:♥)

『もうやめて:♥続けられたら:ダメになっちゃうから:♥』





「あっ♡あっ♡それダメっ♡やめっ♡あっ♡
イクっ♡イツちゃう!!イクイクイクっ♡」

「ほんとにだめっ♡イツ…くう
はあっ♡あっ♡ああっ♡」

どろろ

びび

カリ♡
カリ♡

カリ♡
カリ♡

あぁ♡♡

あぁ♡♡

(乳首で…イカされちゃった…♥
こんなこと…しちゃいけないのに…♥)

「久々の乳首イキ、気持ちよかっただろ？
今日はもっとイカせてやるからな、覚悟しとけよ？」
「いやあ…あなた…助けて…♥」

